

2020 年

フランス海外スターージュ報告書

フランス語教育スターージュ運営委員会編

日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館

本報告書は、Covid-19 の感染拡大の影響により 2020 年 3 月 16 日～19 日に実施予定だった日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館主催のフランス語教育国内スタージュの応募者のうち、2020 年 8 月にオンラインで実施された教員研修コース (CLA) に参加した方によるフランス (海外) スタージュの報告書です。

2020年CLAオンライン研修の報告

石川 典子

2020年8月3日から8月7日まで、フランス大使館の奨学金を受給して、フランシユ＝コンテ大学付属応用言語センターの夏季フランス語教授法研修に参加した。

本研修は、本来であれば8月3日から8月13日までCLAの所在地、ブザンソンで行われる予定だった。4月に参加が決まった後は、フランス大使館のコーディネーターの方を通して書類の手続きなどを進めていたが、コロナウイルスの感染拡大に伴う影響で、CLAでの対面授業は全て中止となり、6月末にその旨連絡があった。その後、対面授業の代わりに遠隔授業に参加することが可能になったとお知らせいただき、7月中旬に受講するモジュール（全7.5時間のオンラインコース：1.5時間×5回）の選択を行った。

モジュールは、以下の8つの中から選択することができた。

1. Motiver les ados à travers une pédagogie active
2. Enseigner la littérature en classe de FLE
3. Évaluer en classe de FLE
4. La société et la culture françaises aujourd'hui
5. Concevoir une unité didactique à partir de documents authentiques
6. Concevoir et animer une formation en ligne
7. Enseigner la grammaire autrement
8. Favoriser les pratiques ludiques et créatives
9. Animer un cours avec une médiathèque

オンライン授業の使用ツールはZOOMで、授業開始前にCLAの担当事務の方からENT（Espace Numérique de Travail）への登録方法について、担当教員よりZOOMアドレスについての通知があった。

私はCalorine Langer先生による「Enseigner la grammaire autrement」を受講した。世界各国（イラン、タイ、日本）から受講生が参加していたため、時差を考慮して授業はフランス時間8時30分（日本時間15時30分）から始まった。本授業は、文法を教授するための様々な方法（歌、映画、ゲーム、アプリケーション）を活用する方法を学ぶことが目的だった。感染症の影響で遠隔授業を余儀なくされている中で、今年は特に、ヴァーチャル授業で活用可能なインターネットツールの紹介（Kahoot!, Mentimeter, LarningApps et Padlet）が主となった。例えばMentimeterは、簡単にパワーポイントのよ

うなスライドを作ることができるアプリだが、一つのプロジェクトをクラス全員が共有することで、皆でブレイン・ストーミングのようなことができる。オンライン授業の場合、諸事情により顔が見えない場合も多く、生徒とのコミュニケーションが難しくなることもあるが、このようなアプリを使えば、発言することに抵抗があるような生徒も気軽に匿名性を保持したまま先生に質問や、意見の表明をすることができる。Mentimeterを用いた文法授業法としては、「接続法を用いた文章を作成してください」といったお題を出し、学生の提出した回答をクラスで検討するといった活用法が提案されていた。

全ての授業素材は ENT を経由してダウンロードすることができ、課題も全て ENT 上に提出した。用意されていた資料は膨大で、全てについては取り扱われなかったことが残念だったが、研修開始から 6 ヶ月間はアクセス可能とのことだった。各国から集まった受講生は、私以外みな教育歴があり、グループ作業を通じて彼らの経験を知ることは、私にとってこれからの参考となった。研修参加前には漠然としていた授業の様子を、今では具体的にイメージすることができる。接続トラブルなども多発し、対面授業に比べると体感時間が非常に短く感じたが、コロナウイルスの状況下においてもこのような授業に参加できたことは、非常に貴重な経験となった。難しい局面においても研修開催に向けて尽力して下さったフランス大使館の方々、またこのような機会を下さったスタージュ運営委員会の皆さまに深く感謝申し上げます。

研修報告

大池惣太郎

1. 概要

国際的な感染症の拡大によって、予定された国内スタージュおよびブザンソンでの夏季研修は残念ながら中止となった。代わりに8月3日～7日の五日間、フランシュ・コンテ大学附属応用言語センター (CLA) 主催によるオンラインのモジュール別講習 (90分×五回) に参加することができた。

報告者が選択したのは、「オンラインで実習を組み立て、進行する」(« concevoir et animer une formation en ligne ») というモジュールであり、エクス・マルセイユ大学の Chloé Pellegrini 先生を講師として、各国から参加した 13 名の受講生と、zoom を通した五回のワークショップを受講した。

例年のプログラムと比較すると、今年度の研修は単一モジュールの受講にとどまる限定された内容ではあった。とはいえ、「オンラインで実習を組み立て、進行する」ことは、四月以降まさに対応を迫られている課題であるため、講習は時宜を得たたいへん貴重な機会だったと言える。

講習を通じて、オンラインでフランス語の授業を組み立てるための様々なポイントを学んだ。学んだことはいずれも実用的であり、FLE に限らず他のオンライン授業でも踏襲すべき内容が多かった。加えて、今回学生の視点から zoom による遠隔授業に参加できたことも、貴重な経験だった。

以下、五回の講習内容をごく簡単に振り返り、報告としたい。

2. 講習「オンライン授業を構想しリードする」の内容

五日間の講習では、主に、

- (1) オンライン授業に必要な技術的前提および zoom で使える基本ツールの確認
- (2) 遠隔ライブ授業の特徴、それに伴う物的・心理的な条件の理解
- (3) 実際にオンライン授業を行う上での注意、および zoom 活用の実習
- (4) 授業の組み立て練習（導入方法、fiche pédagogique の作成、assynchrone な課題の想定等）
- (5) オンライン授業で活用可能な様々なインターネットコンテンツの紹介

などが行われた。いずれも学ぶべきことが多くあったが、とりわけ(2)について、こうした学習機会にあらためて確認しなければ素通りしがちな重要な事項であると感じた。

Pellegrini さんが再三強調した点として、対面授業とオンライン授業の違いをよく理解することの重要性が挙げられる。対面に比べ、オンライン授業は受講者の集中力が持続しにくく、受講に伴う疲労感も格段に大きい。animateur としての講師の役割はオンライン授業においていっそう大きく、受講者を « actif » な状態にしておくために通常以上の配慮を要する。

たとえば、オンラインの参加者はフィジカルに空間を共有していないので、「参加」の実感を維持するために、自然な形で小まめにレスポンスを促す工夫がある。集中が切れやすいことを意識して、コンテンツやワークを早めに切り替える配慮もある。加えて、講師はテクニカルな部分でトラブルが生じていないか、常に気を配る必要がある。ネット環境に問題が生じたり、ツールをうまく使えない受講者が出たりした場合は、受講者を放置せず、慌てずに不測の問題に対処する柔軟性・想像力・寛容さが求められる。こうしたことを、講師一人が要領よくこなすことはたいへん難しい。それゆえ、講師一人が無理するのではなく、受講者にもオンライン授業に制約があることをよく理解してもらい、その環境に積極的に馴染んでもらうよう働きかけることが大切である。

このように、オンライン授業では 90 分すべてを授業コンテンツの消化に割くことはできない前提で授業を組み立てる必要がある。対面授業と同じ時間配分や進め方が適用できないことを事前によく理解し、短くコンパクトな授業構成をすることが大切だと学んだ。

他方、オンライン授業であろうと、FLE が要請する 6 つの能力を毎回活用する授業にしなければならないし、またそれが可能であることも学んだ。オンラインでは受講者がしばしば一方的に聞いているだけの状態になりがちだが、そうならないよう、様々な形でリアクションを促し、参加型の細かなワークを取り入れる必要がある。たとえば、zoom のチャット機能やホワイトボード機能を使って双方向型リアクションを引き出す、などである。講習では、具体的にどのような課題を与えればいいのか、実際の授業プランを作りながら検討した。

また、zoom 授業が単にネガティブな制約であるばかりでなく、工夫次第で対面にはできないことをするチャンスともなる、という点も講習で学んだ。一例として、*expression écrite* のワークをする場合、zoom を使えば参加者を匿名の状態にしたまま一斉に板書をすることができる。参加者の答案を通じて授業を組み立てる場合、特定の人を *culpabiliser* しないで回答の検討に進むことができるわけである。

講習ではさらに、仮想の *fiche pédagogique* を作成する、ワード・アートソフトを使って授業の導入をするなどのワークショップを行った。ワークショップはルーム機能を使って行われたが、これは実際の授業で自分がグループワークを組織する練習にもなった。また、講習の最後に無料で使えるラーニング・アプリケーションがいくつか紹介されたことは、今後の授業コンテンツを考える上でたいへんありがたかった。

3. 日本で授業を行う場合の課題点

以上のように、講習は実際的で有意義な内容に満ちていた。他方、実際にそれを実施する場合、いくつか障害がある点にも思いいたらされた。

まず、人数の問題がある。今回の講習で行ったようなワークを実施するには、せいぜい 10 名強の受講者に抑えられていることが理想的である。しかし、日本の大学の場合、語学のークラスが 20 名を優に越えるのが一般的である。そうになると、毎回 6 つの能力を使わせ、全員にリアクションを促すことが難しくなる。実

際に授業をする場合、さらに何らかの工夫をする必要があると感じた。

また、顔出しの有無という問題がある。遠隔会議ソフトを使う場合、参加者が顔出しをするかしないかで雰囲気が大きく変わってしまう。多くの大学では、学生がプライベートな空間から受講していることに配慮して、顔出しを強要していない。とくに日本の学生は顔出しを恥ずかしがる傾向があるし、履修者が多くなるとデータ量もそれだけ大きくなる問題もある。顔出しを強要できないことはやむを得ないとして、顔写真を上げてもらうなど、講師と受講者の間にコミュニケーションの黒い壁が立ちはだからないような工夫がいる。

最後に、これはオンラインに限らず FLE 全体に関わる問題だが、フランス式の FLE 授業を日本で実施しようとする場合、やはり中級クラス以降のワークがうまく成り立たない印象がある。間違ってもいいから話す、自由に発言するという態度は、日本の教育において明らかに推奨されていないため、大学生はしばしば話す、発信するということ自体に抵抗を抱いている。グループワークも、単純なロールプレイはともかく、創発的なものであればあるほど成立しにくい。こうしたことは、単純な FLE の技術だけで解消できるものではないので、授業の中で個別に工夫し、その都度方法を模索していくよりないだろう。

4. おわりに

講師の Pellegrini さんのレクチャーは、丁寧かつ論旨が明確でとても聞きやすかった。何より終始打ち解けた雰囲気ですべてを animer してくださった。東欧・アジア・南米・中東の各地から参加した受講生の皆さんも、積極的かつ convivial な姿勢で授業に参加していた。オンラインでライブ授業をする場合は、双方向の参加が必須であることを強く実感した。Pellegrini さんと講習生の皆さんにこの場を借りてあらためてお礼を申し上げたい。

最後に、国際イベントを組織するのが困難な状況のなか、様々な制約と障害を越えて貴重な学習機会を提供してくださったスタージュ運営委員、フランス大使館ならびにアンスティテュ・フランセの関係各位に、心より御礼を申し上げます。

2020 年夏季オンラインフランス語教員研修

栗原唯

2020 年度在日フランス大使館の奨学生として 8 月 3 日から 8 月 7 日の 5 日間、フランシュ・コンテ大学応用言語センター (CLA) によって開催されたオンラインフランス語教員研修に参加した。このオンライン研修は、フランスのブザンソンで開催予定であった約 2 週間の現地研修のコロナウィルス感染拡大による中止を受けて、新たに企画されたものである。当初は開催形式の変更により奨学生としての参加が危ぶまれたが、在日フランス大使館の尽力により、このオンライン研修を給費の援助を受けて参加することができた。

1. プログラムの概要

8 月 3 日から 8 月 7 日の 5 日間にモジュール (module) と呼ばれる 1 時間半の授業を 1 つ、オンライン (Zoom アプリ) で受講した。モジュール (module) は数ある選択肢から選ぶことができ、私は昨今の遠隔授業の需要の高まりを鑑み、Concevoir et animer une formation en ligne (オンライン教育を構築し、運営する) モジュールを選択した。世界各国の参加者がそれぞれの国からオンラインで参加するため、時間帯は各モジュール、各クラスの受講生の国との時差を考慮して決定された。

2. 受講内容

講師には Chloé Pellegrini 氏を迎え、zoom などオンライン教育に必要なツールの効果的な使用を目指した技術的指導のほか、学習者と場を共有しない、オンライン授業に固有の制約に合わせた授業作りのメソッドを教授して頂いた。オンライン授業では学習者の集中力は低下しやすく、また採用できる活動にも制限があるため、如何に分かりやすい、飽きない、また学習者の自主的な学習を促す授業を組み立てるかは、対面式授業以上に重要となってくる。このようなオンライン授業ならではの困難への対処法について、15 人ほどの参加者とディスカ

ッションを行い、また実際のオンライン授業を想定した授業シナリオをオンライングループワークにて作成した。

3. 終わりに

本年度はオンラインで縮小した形式での研修となってしまったが、自国にしながらフランス開催の研修に参加し、各国の教育者と交流ができ、大変貴重な経験であった。欧州、北アフリカ、中東、アジアからの参加者と時間・場所の垣根を越えて共に学習し、意見交換することができ、オンラインの可能性を強く実感した。また、受講生の立場で研修に参加し、グループワークを行ったが、一方通行になりやすいオンライン授業において、グループワークは参加者の積極的な発言を促すのに非常に有効な手段であることがわかった。後期授業では早速これを取り入れ、より活気のある授業を展開することができている。

フランシュ＝コンテ大学応用言語学研究所夏季スタージュの報告

實谷 総一郎

本年は新型コロナウイルスの蔓延により、フランス、ブザンソンでのスタージュの開催が危ぶまれる状況にあったが、最終的にオンラインという形で実施されることになった。厳しい状況の中で、研修生のための機会を作ってくださったフランシュ＝コンテ大学応用言語学研究所（CLA）と大使館の担当の方、ならびに日本のスタージュ運営委員会の皆様にこの場を借りて深くお礼申し上げたい。

概要

新型コロナウイルスの影響により、3月の日本国内でのスタージュは中止となったが、フランス、ブザンソンでのスタージュへの選出は行うとのことで、3月下旬に遠隔での面接試験が実施された。その後、現地開催か、オンラインか、あるいは現地に行った上でのオンラインか、など様々な方法が検討され、最終的に日本の自宅で、オンラインで受講する方式となった。例年は選択科目を三つ選び、さらにアトリエやフォーラムと呼ばれる単発の講座等を受講できたようだが、本年は選択科目一つを受講するという縮小された形での開催となった。授業の評価方法に関するもの、現代フランス文化に関するもの、アクティヴ・ラーニングに関するものなど9つの選択肢から選べた。実施期間は8月3日から7日までの5日間で、毎日1.5時間の授業を受講するというものだった。授業前後に一回ずつアンケートがあった。

選択科目 Enseigner la littérature en classe de FLE

私は文学を使ってフランス語を教える「Enseigner la littérature en classe de FLE」という科目を選んだ。授業は日本時間 19:15-20:45 に Zoom で行われた。受講生の中には接続が不安定になり一時抜けてしまう人もいたが、私の場合は映像、音声とも問題なく、すべてに参加できた。授業内容は、事前に配布された授業概要に記載されていた通り、文学作品に親しんでもらうための工夫や利用できる作品の紹介が主だった。授業全体の特徴として、ICT ツールをはじめとしたオンライン上の教材の紹介がかなりのウエイトを占めていた。具体的には、オンライン上に多肢選択問題やアンケート等の作成が

できる Mentimeter、オンライン上に簡単に発音を録音できる Vocaroo、自分で作成したアバターに録音した音声を話させる Voki などがあった。また、詩を基にした歌の YouTube の動画やビデオ会議ツールを用いた演劇の例も紹介された。現在 Zoom 等を用いたオンライン授業が中心となっているため、こうした授業は大変有益であった。また、文学でフランス語を教えると言えば、日本では講読以外の方法になりにくいのが、本講座では、学習者に詩の朗読や簡単な演劇、あるいはテキストについてのディスカッションなどを導入し、語学習得に係る 4 技能のすべてが満遍なく伸びる形で文学が用いられている点が印象的であった。講読に近い内容の回もあったが、その際にも、ただ文の意味を理解することで終わるのではなく、文章から「幼少期の記憶」、「異文化理解」などテーマを引き出し、発展的・創造的に議論していく姿勢があり、私自身の授業で活かしたいと考えた。

おわりに

現地に行かれなかったこと、そしてそれが故に他の研修生との交流が少なかったことは残念ではあったが、講座から学んだものは多かった。私はまだ教師としては駆け出しのため、自分自身の授業に対する考え方の基盤を作る上で大きな意義があった。また、オンラインであるが故の和やかな雰囲気があったためか、受講者からの発言が大変積極的で、フランス語教育の実践例をお互いに共有できた。各国から参加している教育への意識が高い受講者の方々に接したことで私自身のモチベーションにもなった。今年の CLA でのスタージュは縮小された形であったとはいえ充実した内容であった。今回の経験をもとに今後ともフランス語教師として精進していきたい。

2020年9月21日
法政大学人間環境学部教員
竹本 研史

2020年フランシュ=コンテ大学ブザンソン応用言語センター

(CLA) オンラインフランス語教育海外スタージュ報告書

Covid-19の感染蔓延により、2020年3月中旬にアンステイテュ・フランセで開催予定だった国内スタージュは残念ながら中止となってしまった。その後、3月下旬にオンラインにて海外スタージュの選考面接が行われた。だが世界的に感染は収束することはなく、ブザンソンのフランシュ=コンテ大学のCLAにおいても開催が危ぶまれる一方、報告者自身も、海外スタージュのための手続きを続けつつ、日本政府ならびに勤務先大学・学部が海外出張を許可してくれるかどうか不安を抱いていたのは事実である。最終的には、在日フランス大使館の奔走とひとかたならぬご尽力により、2020年はオンラインで開催されることになった。

オンライン・スタージュでは、例年と異なり（2019年以前の報告書を参照のこと）、1つのモジュールを1日1時間半5日間の日程で受講することになった。提示されたモジュール候補は下記の通りである。

1. Motiver les ados à travers une pédagogie active
2. Enseigner la littérature en classe de FLE
3. Évaluer en classe de FLE
4. La société et la culture françaises aujourd'hui
5. Concevoir une unité didactique à partir de documents authentiques
6. Concevoir et animer une formation en ligne
7. Enseigner la grammaire autrement
8. Favoriser les pratiques ludiques et créatives
9. Animer un cours avec une médiathèque

当初、報告者は1と3で迷い、3を選択したが、フランシュ=コンテ大学の担当者からの連絡で3、4、9は受講できないことになり、果たして報告者は1を選択することにした。本来、報告者の専門領域に鑑みれば、フランス文学を教えるモジュール2を選択するべきであろう。あるいは、報告者がふだん勤務先や非常勤先でおもに文法や講読を中心に授業を行なっていることから、モジュール7を選択することもあり得ただろう。

しかし、報告者は、2016年4月の入職以来、勤務先の市ヶ谷キャンパス全体で一般教養としてフランス語を教えたりカリキュラムを担当したりしているとはいえ、所属学部はサステナビリティ・スタディーズを学ぶ場である。SDGs、まちづくり、途上国援助、環境問題などについて関心を寄せる学生が多く、彼女ら、彼らの関心地域も「地元」を中心とした日本国内、もしくは漠然とした「グローバル」に限られる。そのような彼女ら、彼らは、フランス語、フランス語圏文化を学習する意欲が必ずしも強いわけではない。ましてや、ゼミに入って専門的な学習を始める2年生になるとその傾向が一段と強くなる。報告者としては、そのようなフランス語やフランス語圏文化を学ぶことに必ずしも積極的とは言えない学生たちにどのようにフランス語やフランス語圏文化を学ぶモチベーションを与えるかがこれまで喫緊の課題であった。そのため、1を選択した次第である。

講義は、ヴァネッサ=ジャド・パリゾ (Vanessa-Jade PARISOT) 先生のもと、2020年8月3日月曜日から7日金曜日まで行なわれた。受講者は、フランス、スペイン、スイス、サウジアラビア、ウクライナ、イラン、カザフスタン、そして日本(報告者の他に、同じプログラムからお一人参加された)と世界各地からの参加があった(メキシコからの参加もあったようだが、時差があまりにも違いすぎるので、パリゾ先生は別途授業を行なっていた)。オンライン授業ならではのことではあるが、世界各地から同時に受講するかたちであったので、先生も時間調整に難儀した様子だったが、先生のご厚意でフランス時間午前7:00から授業開始となった。日本だと14:00で非常に都合の良い時間帯であった。

初日の各人の自己紹介および受講理由とパリゾ先生からのコメントである。参加者はどちらかというところ中等教育に従事している先生方のようで、大学などの高等教育に携わっているのは、報告者と同じくプログラムに参加した方だけのようにであった(発言は自由であったので、1週間の日程で1度も発言しなかつ

た方々もおり内実は不明である)。

報告者が、受講の動機として披露したのは、上記で述べた (1) フランス語を学ぶことに意欲が湧かず卒業単位に必要なため消極的に履修している学生に対してどのようにやる気を与えるのか、の他に、(2) オンライン授業となった 2020 年度春学期を承けて、今後どのようなかたちでオンラインによる語学教育を行なえば良いか、(3) 報告者は 40 半ばにさしかかり、学生と年齢がどんどん離れていくため、年々学生が何を望み、何を考えているか把握しづらくなりつつあるなかでどのように学生と接すれば良いか、というものであった。

授業は、パリゾ先生が作成した下記に基づいて進められた。

Objectifs de la partie théorique :

- Définir l'adolescence et l'adolescent
- Se remémorer les stratégies d'apprentissage, la définition du « bon apprenant »
- Comprendre le développement physiologique et neuro-psychique de l'adolescent pour adapter ces stratégies.
- Aborder la pédagogie active

Notions-clé : sens, motivation et désir

Objectifs de la partie pratique :

1. Comprendre les intérêts des adolescents pour en faire des supports ; faire de nos ados des alliés dans l'équipe d'enseignement-apprentissage.
2. Rendre nos scénarisations actives pour rendre nos activités motivantes
3. Utiliser la classe inversée
4. Identifier les avantages et inconvénients de la classe à distance

(上記2つの表はパリゾ先生の授業前配布資料、Vanessa-Jade Parisot, « Motiver les Ados par une pédagogie active – du 03/08 au 07/08/2020 – » からの引用)

理論的には、学習戦略（認識的戦略、メタ認識的戦略、社会感情的戦略）や、それを可能にするための青少年の生理学的・神経心理学的発達について説明がなされた。実践面では、青少年の複言語・複文化能力の引き出し方や、母語や他の言語とを比較しながら授業を行うこと、オンライン授業のやり方などが具体的に講じられた。一方、Débat mouvant という議論のスタイルや、現在日本でもこのコロナ禍で大学教育の新たな方法として注目を集めている「反転授業 (la classe inversée)」が紹介された。その都度、パリゾ先生は私たちの理解や実践の助けになるような動画やインターネットのサイトなどを次々に挙げてくださった。また、インターネットの接続の調子が悪かった場合や、復習をしたりする場合に備えて、ある学生からのリクエストでパリゾ先生が毎回授業の録画を撮り、私たちに共有してくださった。

例年とは異なり、オンライン授業のためか、アトリエのようなものではなく、1週間パリゾ先生の講義とそれに基づくパリゾ先生および受講生たちとの議論が中心であり、zoom のブレイクアウトルーム機能を使ったロールプレイングのようなものも実施されることはなかった。しかしながら、パリゾ先生と受講生たちとのあいだで活発に議論が交わされ、毎回 90 分間で授業が終わることはなく、最終回は 1 時間近く延長した。報告者としては、積極的に発言を心がけたものの、フランス語が拙くてなかなかこちらの言いたいことがうまく伝えられなかったが、世界各地の教員たちと同じ時間と同じバーチャル空間を共有する喜びと、新たな知見が得られるという知的刺激で、1週間じつに充実したスタージュであった。

通常の講義のほか、セバスチャン・トゥシャール (Sébastien TOUCHARD) 先生による文化プログラム (8/5 (水)「表現 (LES EXPRESSIONS)」に関するゲーム、8/6 (木)「言葉と地方 (DES MOTS ET DES RÉGIONS)」に関するゲーム、8/7 (金)「表現の起源 (ORIGINES DES EXPRESSIONS)」) も 3 日間にわたって開催された。どれも、非常に興味深いテーマであったが、現地時間で 18:00 開始であり、時差の関係で参加できなかったのが非常に残念なことであった。

パリゾ先生のご厚意で、1週間の講習ののち、受講生同士で、あるいはパリゾ

先生に気軽に連絡を取れるようにしてくれた。また、パリゾ先生のお誘いで、私たちは今年 2020 年の年末にもパリゾ先生主催で自主的な勉強会を行う予定であり、私たちの講習は、フランス語教育とともにこれからも続く。

末筆になるが、日本フランス語フランス文学会の先生方、日本フランス語教育学会の先生方、そして在日フランス大使館のマクサンス・ロバン氏、萩尾英理子氏には今回貴重な研修の機会をいただいた。このような機会を与えてくださった関係各位に、深甚の感謝を申し上げる次第である。

以上

2020年夏期スタージュ報告書

田ノ口誠悟

はじめに

私は、2020年8月3日から7日まで5日間行われた、ブザンソンのCLA (Centre de linguistique appliquée) が主催する夏期フランス語教育スタージュに参加した。例年であれば、ブザンソンで約2週間実施されるのであるが、今年度はコロナの世界的蔓延により、リモート形式(オンライン会議アプリ Zoom を使用して)で行われ、また期間と内容も短縮された。とはいえ、日頃フランス語教育を行う中で一人悩むことも多かった私にとっては、体系的な仏語教育の方法論を学ぶことが出来、また世界中の同業の先生方と意見を交換出来るまたとない機会であり、大いに勉強になった。このような状況の中でも開催のために努力して下さった在日フランス大使館の方々、仏文学会スタージュ運営委員会の方々に心から感謝申し上げる。

研修内容

研修内容は、9つあるモジュールの中から一つを選び、一回1時間半の授業に5回参加するというものだった。モジュールは、「Enseigner la littérature en classe de FLE」や「La société et la culture françaises aujourd'hui」、「Favoriser les pratiques ludiques et créatives」など、文学教育、文化教育、コミュニケーション教育にまで至る多彩なものであった。私は、口頭表現力養成の上でいかに学生を活発に授業で発言させるか、授業に参加させるかということについて学びたいと思っていたので、「Motiver les ados à travers une pédagogie active」というモジュールを選択した。

Motiver les ados à travers une pédagogie active の研修内容

授業は、日本時間の14時から15時半まで、5回全てZoomを通して行われた。参加者はフランス以外ではスイス、スペイン、ウクライナ、イラン、カザフスタンそして日本とまさに国際的な構成であった。初回授業の前に担当教員のVenessa Parisot先生から授業で使用する資料(パワーポイントスライド)、読んでおくべき文献の指示があった。配布された資料に書かれていた授業目的は以

下のようなものである。

【理論編】

青年期および青年を定義する／学習計画を考える／青年の身体的、神経生理的成長のあり方を理解する／活動的な教育方法を知る

【実践編】

青年の興味関心ごとを知る／授業・教育案をより活発なものにする／逆転授業 (classe inversée) を活用する／遠隔授業の利点と問題点

授業は、以上のテーマについて教員が講義し、それについて受講者が議論するという形で進められた。5回の授業のうち、前半において理論的テーマが扱われ、後半において実践的テーマが扱われた。各回の授業内容、そこで話し合われたことを私自身のメモをもとに以下にまとめておく。

第一回 (8月3日)：受講者の自己紹介。青年をモチベートすることの重要性について（現代において青年は社会的事情からとてもやる気を失くしている）。インターネットによる学習のあり方の変化にいかに対応するか。pédagogie（教育法）を身につけるより éducation（教育）を実践しなければならない。自分の教育を科学的見地から vérifier（検査）する。

第二回 (8月4日)：客観的な教育計画の立て方、脳神経と学習の関係性についての講義。外国語教育法についての基礎文献の紹介。フランス語でフランス語を教えること（特に口頭表現教育で）の難しさ。脳神経を刺激する方法（多色ペンの使用、遊戯の導入）。受講者を apprivoiser（親しくさせる）方法。学習停滞期にいかにもチベートするか。

第三回 (8月5日)：客観的教育計画の立て方（続き）。認知のレベル、メタ認知のレベル、社会情緒の各レベルにおける学習。生徒に自己評価させる方法。外国語の実践方法（会話、論述）。発音教育の方法（音楽、映画の視聴により耳を良くする）。生徒の学習上の感情の管理。

第四回 (8月6日)：言語（仏語）教育と文化（仏文化）教育を両立させること。文化的、社会的事柄を語学教育で教える方法（例：TVドラマの鑑賞）。オンライン教育の問題（コミュニケーションの欠落、読み書きを指導出来ない、身体を使った教育が出来ない）。議論・ディスカッションをさせる方法（例：

社会運動 *débat mouvant* の方式等)。ディスカッション教育におけるフィードバックの重要性。

第五回（8月7日）：学習活動を計画する方法。classe inversée の説明（生徒が自分達で問いを立て、調査する。教師はガイド役に徹する）。教師・生徒間の信頼の重要性。ネット上にある教育ツールの紹介（文学的テキスト、文化教育用動画など）。生徒に教育ツールを与える／知らせることの重要性。授業への参加のさせ方の方法（カードでの意思表示、映画・演劇・小説のワンシーンの演技）。

以上のように、リモートであるといえども非常に盛りだくさんの内容であった。生徒／学生を授業に参加させる方法の体系を、科学的、教育学的、そしてなにより実践的に学ぶことが出来た。以下、私が研修を受けて感じたことをいくつか整理しておく。

- ① 研修の中では、常にインターネットやパソコンの視聴覚ツールをいかに語学学習で利用するかが議論されていた。やはり、日本に限らず、IT化が教育にもたらす恩恵や効果は重大な関心ごとなのだろうと思った。私自身も担当しているフランス語の授業で YouTube などの動画投稿サイトやインターネット上の画像、パワーポイントなどを毎回のよう利用し、そして現在はリモートワークということで Zoom も利用している。新しい教育ツールの利用は受講者の学習に対して刺激になると感じているので、研修で教わったツール、技術もどんどん活用し、より魅力的な授業作りに励みたいと思う。
- ② フランス語教育だけでなく、フランス文化の教育についても話題が集まっていたことが印象に残った。外国語教育において、ただ単に言語の教育だけに専念するのか、学習対象言語の地域の文化全般も同時に教育するかは常々議論されて来たことだと思うが、現在は言語と文化を同時に教育して行く方が世界的な潮流になっているのかも知れない（これには、①と関係するが、インターネットの発達により外国の文化に関する様々な資料を手軽に入手出来るようになったことが大きいだろう）。私自身も、フランス語を身につけるにはフランス文化について知らなければならないと考え、フランス語の授業では必ず時間を取って食生活や美術館、劇場、教育制度、時事問題などに関する動画を見せ、議論をしてもらうようにしている。研修に参加することで、自分の教育方針に自信を持つことが出来た。

③ 研修後半の生徒／学生を積極的に授業に参加させる具体的方法という箇所
で、*débat mouvant*（ある政治的・社会的問題について、それについて賛成か反
対かを、参加者が二手に分かれ議論する即興的社会運動）、小説や映画のワンシ
ーンの演技など、演劇的といえる手法が多く紹介されていたことが興味深かつ
た。私はフランス演劇研究を専門としており、フランス語と同時に演劇の講義も
担当しているが、演劇や演技の知見を語学教育に生かすということは考えたこ
とが無かった。これから、演劇の方法論を用いたユニークなフランス語教育法を
試すことが出来たら、と思っている。

おわりに

以上のように、私の夏期フランス語教育スタージュ体験はとても実りの多い
ものとなった。コロナのために研修内容や研修生の方々との触れ合いが減って
しまったのは残念だが、その分、自分の教育のテーマ・問題点について深く考え
を掘り下げることが出来たようにも思う。今回の貴重な体験を胸に、これからも
フランス語教育に打ち込んで行きたい。